

ヘーベス・シーズ
平和や命の大切さをいろん
な視点から捉え、広げていく
「種」が「ヘーベス・シーズ」
です。世界中に笑顔の花をた
くさん咲かせるため、小学6
年から高校3年までの44人
が、自らテーマを考え、取材
執筆しています。

ヘーベス・シーズ
平和や命の大切さをいろん
な視点から捉え、広げていく
「種」が「ヘーベス・シーズ」
です。世界中に笑顔の花をた
くさん咲かせるため、小学6
年から高校3年までの44人
が、自らテーマを考え、取材
執筆しています。

紛争下の子どもたちは、住
むところを追われたり、学校
に通えなかったり、行きたい
ところへ自由に行けなかつた
りしています。不適に逮捕さ
れられや、生命の危険もあ
ります。日本に暮らす私たち
にとって「当たり前の生活」
が送れないのです。

体制派と反体制派、宗教間、
部族間の争いなど、世界中で
紛争の絶える間がありませ
ん。そこで犠牲を強いられて
いるのは、私たちジュニアラ
イターと同じ子どもたちで
す。



ヒロシマの10代がまく種

第6号

平和を知らない子どもたち

当たり前の生活 遠く

第2次世界大戦後、ユダヤ人が自分たちの国をつくるためパレスチナに住んでいた人を排除しました。その後1993年、パレスチナとイスラエルの間で和平合意が結ばれました。

しかし細かい中身が未定で、パレスチナに自治が認められるはずが、イスラエルによる占領状態が続いているま

NPO法人ピースビルダーズ(広島市南区)元パレスチナ事務所代表の今村沙絵さん(29)によると、ヨルダン川西岸では、今は銃撃戦はありま

せん。子どもたちは学校に行き、食料品も普通に買え、日本と変わらない暮らしもあります。

でも、「イスラエル兵に石を投げた」として逮捕される子どもが年間200人もいます。家の取り壊しを要求される、壁や検問所に遮られて自由に行動できない、といった現実もあります。

ガザ地区では空爆があるなど、命も危ないほど生活を送っていますが、ヨルダン川西岸などへ移動することもできないそうです。

(中2上岡弘実)

パレスチナのヨルダン川西岸に住む10~16歳の子ども15人に、インターネットによるテレビ電話で取材しました。

現地では、多くの子どもたちが恐怖や不安を抱えて生活しています。マリアム・アルブラバライさん(15)は「子どもでも逮捕されて刑務所に入れられるのが日常」と言います。サラ・マディアさん(11)は「催涙ガスも使われる」。アイハム・ルシード君(15)はこの日、集合場所に来る途中の橋にいきなり検問所が設けられ、理由もなく長い時間止められたそうです。

今の状態が「平和ではない」と答えた子どもたち。自由を得ることが

平和の前提と言い、「パレスチナが国として独立し、国際社会に認めてほしい」と願います。

このような状況下でも、日本の子どもも同じように楽しみや夢があります。フセイン・カラジャ君(16)は「サッカーをしたり自転車に乗ったりするのが好き」と話します。読書やフェイスブックを楽しむ、という人もいました。将来「俳優になりました」という女の子もいます。

現状を変えるために日本でも協力できることがあると言います。「国際法上、違法な植民地でイスラエルが作った商品を買わないでほしい」と子どもたちは教えてくれました。

(高2河野新大、高1谷口信乃)

ピースビルダーズは2012年から、ヨルダン川西岸で子どもたちのストレスケアのため、ドラマやゲームを使った教育支援をしています。ワークショップ形式で、与えられた役割を演じていろんな立場から物事を考えたり、聞き手に伝えることを意識して自分の気持ちなどを話したりしてもらいました。

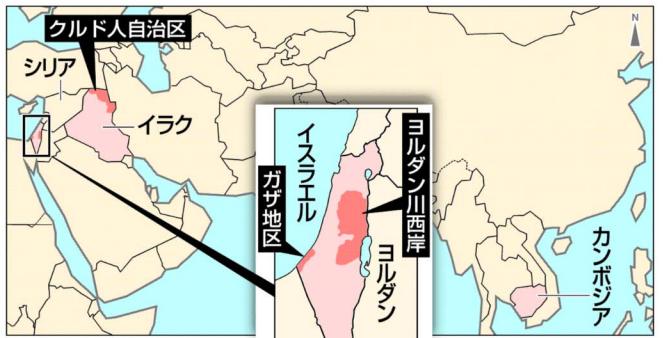
実際に、先生たち教育者向けに実施します。受講者は学校に戻って、生徒たちに実践するのです。これまで227人の先生たちが参

加しました。怖い存在だった先生が身近になり、子どもは心を開くようになりました。集中力も高くなり、自分の気持ちをコントロールできるようにならうです。先生も子どもの視点で接することで、コミュニケーションがスムーズになる効果が見られるそうです。

ピースビルダーズは、この支援をガザ地区でもやりたい、と希望しています。
(高1山田杏佳、中3見崎麻利菜)

パレスチナ 占領今なお

右下 カンボジアが内戦状態だった子どものころを「夢を考えることもなかった」と振り返るリーさん
中上 教育支援のワークショップを実践しているヨルダン川西岸の小学校
左 中教育支援のワークショップを実践しているヨルダン川西岸の小学校
下 下前から3人目 ピースウインズ・ジャパン提供
中下 ピースウインズ・ジャパン提供
左下 ピースビルダーズ提供



生徒ケアへ先生支える

イラク「イスラム国」の影

過激派組織「イスラム国」の攻撃を逃れて昨年6~8月にイラク北部のクルド人自治区に避難した子どもたちは、先行きの見えない生活に不安を感じています。NPO法人ピースウインズ・ジャパン(広島県神石高原町)の協力で、現地の12~16歳の子どもに、避難生活についてのアンケートに答えてもらいました。

子どもたちは、私たちが考える「普通の生活」が送れていません。「友達とサッカーをしたい」「絵を描きたい」「友達と遊びたい」と答えています。中で

避難生活 広島から支援

多かったのが「学校に行きたい」という意見。「学校がない」「お金がない」ので行けないです。学校に行くことができている子どもも「友達や良い先生がいない」「今は毎日行けていない」と記していました。

子どもたちにとって「平和」とは「古里で幸せに暮らすこと」「治安が良いこと」「『こんなにちは』と言いまる」といえることだそうです。「平和実現のためには世界中の人たちと協力することが必要」と訴えています。

(高3木村友美)

ピースウインズ・ジャパンは、イラク北部のクルド人自治区で、避難生活する人々への支援活動をしています。現在、シリアから避難してきた約23万~24万人のクルド系難民と、イラク南部などからの国内避難民約100万人がいます。

シリア難民は、2011年に起きた「アラブの春」と呼ばれる民主化運動による政府軍と反政府軍の紛争から逃れてきました。国内の避難民は、過激派組織「イスラム国」と政府軍との戦闘などにより14年6月ごろから急増しています。

(高3木村友美)

カンボジア 小さな戦地

カンボジア出身で広島市中区でカンボジア料理店を開くリー・サルーンさん(36)は、物心ついた時から、国は内戦状態でした。

「戦争ばかりで、夢なんてなかった。夢を考えることもなかった」と振り返ります。

食べ物もなく、学校にもロケット弾が飛んでくるので逃げていました。「30分か1時間しか勉強できなかつた」と言います。

学校でトラックに乗せられたのです。政府の命令でした。家族に別れを告げることなく戦死した子どもも大勢いたそうです。

家族や友人、食べ物、勉強する時間を奪ってしまう戦争や紛争。リーさんは「自分の経験を二度と繰り返さないよう、未来に伝えたい」と話します。今はほぼ安定しているカンボジア。今後、国内に公民館を建てたり、地雷の知識を生かしてスチーナで地雷撤去をしたりしたいと考えています。

(高1福嶋華奈=写真も、中2岡田輝海)

私たちができること
◆本や新聞を読んで自分の知識を深め、身近な人(友人や家族)に紹介する。
◆インターネットを使ったテレビ電話など会員制交流サイト(SNS)で、現地の子どもたちと交流を深め、互いの視野を広げる。
◆NPO法人などのスタディーツアーや参加して、実際に現地の状況を知る。
◆紛争地域の様子などをフェイスブックなどで発信する。(まとめ・中1川中奈々)